

卷頭言

8月6日に思う

橋本 左内



8月6日朝のセレモニーにて

8月6日の朝のセレモニーで私がお話しいたしました後に

オバマ大統領が、伊勢志摩サミットについて、安倍首相の顔を立てて、広島に足を運んだ、アメリカの大統領（作戦行為として無辜の市民を殺戮・傷害した責任者、戦後71年にもなるのに未だ謝罪も補償もしていない当事者）として犠牲者の前に額づいたのではない、ということを押さえておかなければなりません。その問題点を、同時通訳をしたアーサー・ビナード氏が、次のように鋭く指摘しています。

『広島という「所」で「感」じたものはいっさいない。既製品として岩国演説の前に脚本が全部出来上がっていた。それをおしつけがましく「広島」の名で知つたふうに人類の暴力の歴史を語つて

いるだけ。その歴史も間違っている。だから実際は、「誰でもどこでもインチキヒストリー演説」。／ぼくは「オバマ米大統領広島演説」の翌週に長崎へ行つて、郵便配達の最中にピカに遭つた谷口稜瞬（すみてる）さんといろいろな話をしていた。・・・どうやつて核の地獄から人類を救うかを長崎の仲間と一緒に考え、地道で本質的な活動をしてきた。それが谷口さん、そして亡くなつた山口仙一さんの偉業だ。そういう本物の取り組みをした人からみれば、「オバマ米大統領広島演説」は、核廃絶に何も結びつかない。意味不明の演説。』

この「広島立寄り」の際に写された2枚の写真を紹介しながらお話ししたのでした。1枚は、米軍兵士の被爆者を探し出す苦労をされた森重昭さんをオバマ氏が抱きしめるもの。もう1枚は、日本被団協会長の坪井直さんがオバマ氏と握手しながら、彼の心を直指して磊落に話す写真です。この時、一緒に腰かけていた岩佐幹三さんと谷口さん（体調で欠席）とは副会長です。これらのヒバクシャの重鎮は、原爆の地獄・ヒバクシャの苦難・核兵器廃絶運動の生き字引です。この人々のお話を拝聴してから、心魂を傾けての応答として「大統領スピーチ」を書くべきであった、とビナードさんは求め

ているのです。6日の朝の、私の話の趣旨も同じで、坪井さんの人差し指は、オバマ大統領の「演説」（プラハの虚構も含めて）の「虚偽不実」を射抜いているのです。しかし、坪井会長は「リメンバー・ヒロシマ（復讐を忘れるな）」とは言わないで、和解の立場から「大統領を止めたら、また広島に来んさい！」と言つたのです。オバマ氏の人間としての真実が問われています。秋葉元広島市長の「平和宣言」（2002年）の和解の項と合わせてお読みくださることを望みます。